WEP

VOL. 137
ウエップ
俳句通信

俳句通信

特別作品20句　池田澄子「さざんか八重」

特集〈林桂著『俳句の一欠片』
坪内稔典著『老いの俳句』を読む〉

林桂著『俳句の一欠片』を読む

松田ひろむ　俳壇の「歴史探偵」
外山一機　林桂による「林桂」
中本真人　「研究」としても読まれるべき一書

坪内稔典『老いの俳句』を読む

小野あらた　対等の輪
高柳克弘　現代俳句への危機感
西池冬扇　老いを演じるための稔典句伝書

【新作24句】
青山　丈「秋と冬」

【競詠16句】
大島英昭「野紺菊」
鳥居真里子「結び狩衣」
三宅やよい「残日」

作品／下鉢清子・加藤耕子・遠山陽子・松岡隆子・戸恒東人・岩岡中正・西村和子・能村研三・井上康明・岸本尚毅・上田日差子・落合美佐子・中山世一・田宮尚樹・宮谷昌代・谷中隆子・佐藤　風・柴田多鶴子・富吉　浩・阿部王一・加藤かな文・大橋一弘　ほか

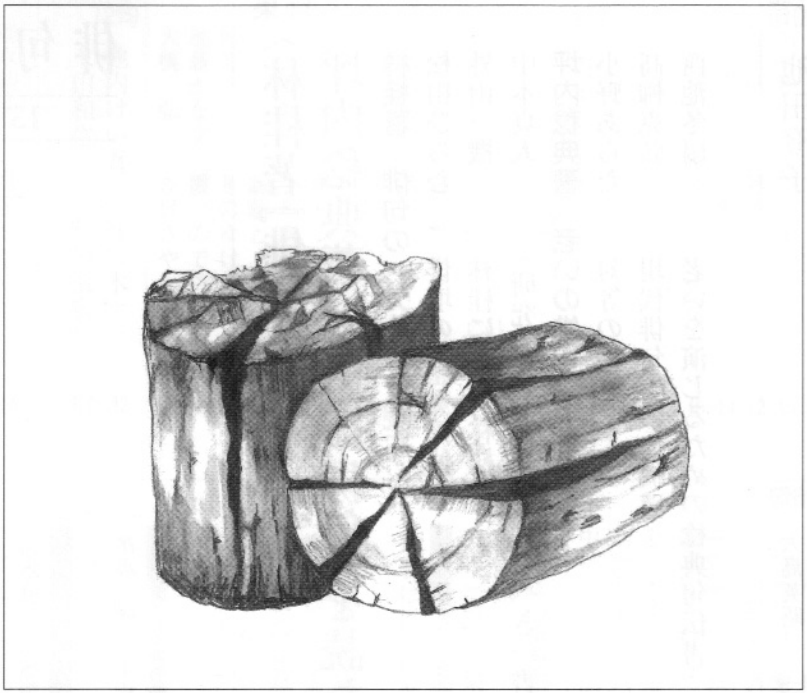


イラスト　田中丸葉子

炭（すみ）・煉炭（れんたん）

炭つぐや静かなる夜も世は移る　五十嵐播水

白薔薇のひらく形に炭をつぐ　加藤知世子

煉炭の火口に種を突きおとす　秋元不死男

小学生のころ、自転車のうしろにリヤカーをつないで、近くの炭屋へよく炭を買いにいった。母は「やわらい炭とかたい炭を」というので、炭屋にそれらを積んでもらった。ほかに煉炭、炭団、それに薪を何束か。

風呂をわかし、飯を炊くのは薪、七輪で何かを煮たり焼いたりするのは炭か炭団、火鉢に入れるのは炭か煉炭。

家には火鉢が三つあって、来客があるときはいつもは使わない火鉢に炭火を入れて出した。いつも使っていたのは、少し大きめのやつで、玄関を入った先の四畳半にあった。その火鉢の炭火ではよくカキ餅やアラレを焼いて食ったものだ。

いまでもよく思い出すのは、中学2年のとき、火鉢の炭を煉炭に置きかえて、その煉炭の穴からあがる青い炎をときどき眺めながら翌朝までに「夏目漱石集」一巻を読み切ったこと。その一巻には漱石の代表作が収められていたが、読み終わったあと、何を読んだのかほとんど覚えていなかった。以来、漱石を読み返すことはたまにしかない。

（大崎紀夫）

特別作品20句

さざんか八重

池田澄子

月々に月見る窓や雨の月

鶏頭と虚子編正岡子規句集

多分月夜茸と言いつつ二回撮る

孔子とか孟子とか種茄子とか

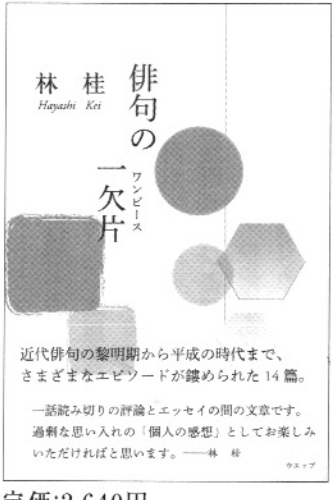
冬近し白髪三千丈は無理

林桂著『俳句の一欠片（ワンピース）』
坪内稔典著『老いの俳句』を読む

特集

この10月20日に林桂著『俳句の一欠片』、
10月30日に坪内稔典著『老いの俳句』が弊社より刊行されました。
この2冊の著書をそれぞれ3人の俳人に読んでいただきました。

定価:1,760円
（本体1,600円＋税10%）



定価:2,640円
（本体2,400円＋税10%）

超結社句会／新12番勝負

前列右から森岡氏、高橋氏、福神氏
後列右から星野氏、藤本氏、中村氏

ゲスト　高橋道子・中村十朗
福神規子・森岡正作

ホスト　星野高士・藤本美和子

編集部　本日の参加者は「鴫」同人の高橋道子さん、「や」同人の中村十朗さん、「雛」主宰の福神規子さん、「出航」主宰・「沖」副主宰の森岡正作さん。5句投句、7句選です。忌憚のない意見交換をお願いします。

高士　では、始めます。4点句。

裏口の出入りの増ゆる冬はじめ　（道規高美）

規子　「裏口」と「冬はじめ」がとても呼応しているなと思ったんです。普段だったら、表の出入りをするところを寒いので表は閉めて、何かと「裏口」から小さな出入りをする。ソコソコと出て行く感じがします。「裏口」は上手だと思いました。

道子　「裏口」は何の「裏口」か分からなくて読者にゆだねているんですけど、何かイベントがあるんだなという景が見えてきまして、「冬はじめ」の雰囲気が出ているんじゃないかと。

美和子　頂いたんですが、「裏口の出入りの増ゆる」は具体性に欠けるので、分かりにくいなとは思いました。ただ、